

姚良司教の死去

バチカン、2010年1月12日。(ZENIT.org)

2009年12月30日、レオ姚良 Leo Yao Liang、河北省 Siwabtze 教区の補佐司教が張家荘市にて86歳で亡くなった。

バチカンの機関誌『オッセルバトーレ・ロマーノ』によれば、司教は1923年4月11日、Zhangbei 地区の Gonghui 村で生まれ、1948年8月1日に司祭に叙階され、教区の色んな教会で助任司祭として働いたが、共産党政権によって司祭としての仕事を禁じられ、野菜栽培と薪の販売で生活するように命じられた。

1956年、ローマ教皇のカトリック教会から独立を標榜する運動に加わることを拒否したため、強制労働に処せられた。二年後、教皇とローマ教会への忠実を宣言するという、同じ「犯罪」によって終身刑となった。

1984年、30年弱の禁固生活ののち釈放された。2002年2月19日に司教叙階を受けたが、2006年7月、固言 Guyuan 地方で新しい教会堂の献堂をした後警察に逮捕され、再び30ヶ月の牢獄生活を送った。

釈放されると、常に厳しい監視下ではあったが、あらゆる困難の中で教区の仕事に携わった。毎日曜日のミサには、千人以上の信者が参加していた。

「Yao 司教の死後、当局は信者たちに故人を司教として崇敬することを禁じ、『地下の牧者』という称号を使うように強制した」とバチカンの新聞は非難する。「1月6日の朝、警察の監視と大雪（マイナス30度）にも関わらず、司教の葬儀に参加するために国中のあちこちから信者たちがやって来た。その数は5千を超えた。それは、姚司教が自分の命を羊のために捧げた真の「よき牧者」であったことを示している」とバチカン誌は言う。「司教には、2009年に亡くなった他の6人の司教と同じく、『知恵の書』の次の言葉が当てはまる。「正しい人の靈魂は神の御手にあり、どんな苦しみもそれには触れない。愚か者の目にとって、彼らは死んだように見え、彼らがこの世を去ったのは、災いのように見えた。彼らが私たちから去っていったのは、滅びのように見えたが、彼らは平和のうちにいる。人の目の前で責めさいなまれたが、彼らは不滅の者に希望をかけ、軽い苦しみの代わりに大きな恵みを受けた。神は彼らを試練にあわせ、ご自分にふさわしいものにされ、炉に入れる黄金のように試されてから、完全ないけにえのように、神に受け入れられた」と『オッセルバトーレ・ロマーノ』は結んでいる。